

Saturday

We color your everyday with something Saturday!

Lunch Menu

Appetizer & Salad

-Something light or fresh to wake you up.-

1. Pink 『ふいうちピンク』
2. Glasses 『-3.25 のねぼけた世界』
3. Coffee for two 『おしゃべりなコーヒー』

Main Dish

-Something tasty to make you full.-

4. Lunch Beer 『ノンアルコール』
 5. Vacance 『おしつけバカンス』
 6. Omelette 『AM2:00 のオムレツ』
-

Appetizer & Salad

Something light or fresh to wake you up.

1. Pink

-ふいうちピンク-



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

それは、はた迷惑な僥倖。

Pov. Yuhi

好きな色は？と訊かれたら、ただ簡潔に、黒、と答えてきた。

似合うという意味では嘘偽りのない答えだけれど、単に嗜好としての質問なら、私はずっと嘘をついていることになる。

好きな色と似合う色は違う、という残酷でおせっかいな真実を、最初に提唱したのはファッショ誌だろうか、それともメイクアップアーティストだろうか。

でも一方で雑誌は言う。しあわせになりたいのなら、何かピンク色のものを、と。

どちらにせよ、そんなのは結局似合いたい色が似合う人々や、好きな色と似合う色がマイナーチェンジの範囲内の人々の勝手な言いぐさだと、私は思う。

十十

なのに、最近なんだか、研究室がピンク付いている。

早三十年、心の底から焦がれて、そして、結局何択であろうと、一切選ばずにやり過ぎしてきた色が、視界の片隅で、ときにはど真ん中で、ちらちらきらきらと揺れる。

しょうがない。このピンク色は、生きている。

「はったなつかせんせー！」

まるで生徒が教師を呼ぶような調子で、廊下の向こう側からぶんぶんと腕を振り、新人営業がやって来た。今日も裾と言う裾をひらひらさせながら。パーツと言うパーツをネイルやらリップやらでぴかぴかさせながら。圧倒的にピンク色のオーラを振りまきつつ近づいてくる様は、「なにかピンクのものが迫ってくる」としか言いようがない。

「おはよーございますっ！ 今日眼鏡が素敵ですねっ！」

うわあプラダだっ！と嫌味なくブランド名を指摘して、きゅっと私の背後に陣取る。

「ねむいですよね、私、今日十分遅刻しちゃって。ばれちゃってますっ？」

会話が五線譜に書けたなら、きつとこの子のセリフはスタッカートばかりだろう。興奮した子犬が転がってくるよりも騒々しく、捨てられた猫よりもみゃあみゃあと節操なく愛嬌を振りまいて、今日も千海瑠菜嬢のお出ましである。

せんせい、せんせい、と他の人に呼ばれば「医師」の別称でしかない敬称が、この子にかかる、舌つ足らずな殺し文句に変わる。

「……千海さん」

「はいっ？」

「何度も言ってるけど、病院では静かに」

私もついつい教師然とした口調になってしまい、うっかり調子が狂う。調子が狂っている間に、長年、二人しか入れたことのない研究室に、懐きはしない癖に懐に入り込むのだけは早い猫のごとく、ピンク色の竜巻はするすると入り込んでしまった。

気付いた時には、おしゃれな紅茶ですね、わー私、マリアージュ・フレールの紅茶だいすぎ、わあティーカップもキャスだ、あつすごい！ポットもセットなんですね、私もこれの花柄のやつもつてます！！！とひとしきり棚の前で大騒ぎをしたあげく、頼まれてもいないのに勝手に私の紅茶とティーセットを使ってお茶を入れ、誘われてもいないのにちんまりとソファに座って、もうひとつのカップから紅茶をすすっている。

呆然としていている間に、私の手にもつつがなくカップが握らされていたあたり、もしかしたらものすごくできる営業なのかもしれない、と一瞬血迷ったけれど、その後すすめる菓のひとつも持つてきていないことが発覚したときには、買いかぶりだと冷静になった。

「あつ！そうだ、私、新薬のおすすめに来るはずだったんですよねっ」

次までに勉強してきます！となかなか言えない台詞を吐いて、その日は、何がどうなったのか、私の秘蔵のクッキーの缶まで開けさせて、最後はひらひらと淡いピンク色の爪を、同じくやわらかなピンク色のほっぺたの横で振り、こちらは少しはつきりとしたピンク色の唇で、明日も来ますね！とかなり一方的な宣言をして去って行った。

結局、その「明日」は、その日以来、ずっと更新され続けている。

とりあえず顔を出しとけばいいというMRはこれまでも男女問わずたくさんいたし、それ自体はたいして珍しいことでもない。千海瑠菜が特殊な点と言えば、いつまでたっても薬の話をしていないことと、それから、気づけばいつも当たり前のような顔をして私の後ろについて、人の研究室に入ってくるころだった。

ほんとうに、するりとしか言いようがなくて、毎日びっくりする。気のいい子犬か、まだ自立していない子猫が、ふんふんと匂いをかぎながら臆することもなく、最初に目があった人間の部屋に、しゅるりと足元から入ってくる感じ。

毎回、今日こそは扉の前で立ち止まって、用事が出来てからまたいらつしやい、と高圧的な医者らしくびしゃりと閉め出そう、と思うのだけれど、気づけばピンク色の新人が、にこにこ紅茶やらココアやらの入ったマグカップを手にソファの向かいに座っていて、愕然とする。

今日も今日とて、

「ねえねえ」

と、とても、仕事相手に（それも年上に）対する声のかけ方ではない言葉で話しかけられ、

「せんせいって、美人だからそんなに素っ気ないんですか？」おだてても契約はしないわよ、とだけ返している間に、気づいたら鬼門のドアをくぐってしまっていた。

ちらりとこちらを見上げたまぶたに乗ったアイシャドウも、白い肌に似合うミルキーなピンクで、それに気を取られていたせいかもしれない。こんな細部でも、ピンクに染まっていることが似合う女と、それが不自然な女に分かれるのだ、と。

結局、連続記録をまた更新され、知らず知らず寄ってしまう眉間を揉んでいたら、

「せんせいせんせい」

と、またも女学生のような笑顔でソファに近寄り、じゃーんとべたな効果音つきで、通い始めて三週間が経ってはじめて、千海瑠菜はA4クリアファイルがきちんと入るサマンサ・ベガのページジュピンのバッグから、書類を取り出した。

「……なに、これ？」

えっへん、と生まれて初めて音声で聞く言葉を口にして、今日はパールの入ったピンクに染まった指先で、とんとと、クリアファイルが机の上におかれる。

「うちの新作のお薬です♡」

それは別によかった。私は、たぶん、その書類をみた瞬間にもれなく全員が抱くであろう疑問を口にした。

「……で、なんで紙がピンクなの？」

Appetizer & Salad

Something light or fresh to wake you up.

2. Glasses

- 3.23 のねぼけた世界 -



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

めがねをかけた平日は、どこか少し休日に似ている。

Pov. Runa

出逢って仲良くなった人みんなに、必ず訊く質問がある。

たとえば「無人島にひとつだけ持っていくなら何か」とか、「人生最後の食事と言われたら何を選ぶか」とか、いわゆるそういう「究極の質問」ではなくて、もつと、卑近でささいなこと。

でも、だからこそ、その人がほんとうはどういう人か、もつとリアルな手触りとしてわかる気がして、私はこの質問を、学生のと看からずつと大切に持ち札として手の中に隠し持っている。RPGで魔法使いルートを選んだとき最初に与えられる、破壊力は大きくないけれど身の丈に合っていて、使いやすくシンプルできちんと一定の効力はある、ささやかであたたかな呪文のように。

十十

そんな話をぼろりとしたら、ふだんあまり残業中のお喋りにつきあってくれない上司が、珍しくキーボードを打つ手を止めて、「へえ、なあにそれ。ちよつと気になるわね」とこちらを振り向いた。

あれえ、とその横顔に思う。

やったあ、へんなことで遊佐さんの気を引けちゃった、と。

私が、ガラの悪いスカートを百回折り返して、くちやくちやと甘ったるいブルーベリー味のガムを噛み、ほとんど金髪に近い茶髪に髪を染めていて、セーラー服を着ているはずなのになぜかちよつと卑猥な感じのする女子高生だったら、「ヤリイ」なんて言ってしまったような達成感だ。

入社して2か月が経つけれど、直属の上司は、単刀直入にいうとそんなに面倒見はよくない。なんというか、あんまり先輩然としてない。

もつとも、先輩と言うにはあまりに年次差があるのは事実だ。私は新入社員で、あちらはマネージャーなのだから。ただ、同じ部署の先輩が、わりと同じ時期の異動が多かったというのもあり、またたぶん同性だからという理由も込みで、なんとなく千海瑠菜の上司と指導教官は遊佐葉子が兼ねるという暗黙の了解が、社内的にも出木上がっていた。

ただ、なんだか、思っていたのとは違う。

いろいろとしようもないミスもしているはずなのだけれど、強く叱られたこともないし、かと言って、食事に誘われて悩み相談をして……なんてイベントも、発生していない。

配属されたばかりの頃は、それでもコミュニケーションを取った方が！ と気負っていて、お昼のたびにちらちらと遊佐さんの様子を伺い、ランチに行くタイミングを逃したりしていた

けれど、なんとか、何回か続けていっしょにごはんを食べた後に（そしてそれはそこそ楽しかったのに）、やさしく困惑した顔で、「あのね？　いいのよ、お昼くらい勝手に食べちゃって」と言われた。

かあつと頬が熱くなって、どうしようどうしよう迷惑だった？　と思っっていたら、すぐに今の担当先が決まり、そもそもお昼に会社にいることがほぼなくなったのをいいことに、私はあるとき耳を赤くした気持ちを、心の奥の方にずっと放置している。

とはいえ、新人の身の上なので、他の先輩がときどきやるみたいに、営業先からNRという技はまだ使っていない。一応毎日会社に戻ってくると、たいてい遊佐さんはまだいるので、一日の報告をして、アドバイスをもらいつつ、何かしらの世間話をしたりはする関係は続いている。

うちの社で、女性初のマネージャという肩書を持つ遊佐さんのアドバイスは、いつもとても確だ。MRという職種は、わりとこう、人間性とかそういう正解を見つけづらいところに頼る部分が多い、ついつい大きくなりがちなの仕事のはずなのだけれど、私の上司の指南は、いつさい精神論の匂いがしない。

もつとも、本人は、その肩書と経歴がもたらすバリキャリ感とはずいぶんとかけ離れたプレゼンをしている。おっとりとした笑顔と、穏やかな喋り方で、いつもやわらかな色合いの服を

身に着け、その雰囲気そのままに、私に対する物腰もとてもやわらかい。

アドバイスも、最後はだいたい、「まあね、でも、適当でいいのよー。なんとかなるからスマイルスマイル」で締めくくられ、にへらつとしか言いようのない邪気のない顔で、笑顔のお手本を見せてくれる。

「あ、大丈夫だいじょうぶ。その顔で笑えればね、もうぜんぜん平気。はい、楽勝楽勝」と笑い、ぽんつと肩を叩くのは、私を深刻にさせないための手腕かと思いきや、他の先輩に聞いてみると、「あの人、そもそも本人の仕事の仕方がそれ」と言うことらしく、そういうところがすごく好きだな、と思う。

「大丈夫」と、「楽勝楽勝」と、「その顔ができれば平気」というのが、どうやら遊佐さんの決まり文句らしく、そこには口先だけの感じはまったくない。親身に相談に乗ってくれる、綺麗でやさしく、適度に適当ないいお姉さん、という感じがする。

でも、そうして懐いてみてはいても、あのとき引かれた一線は、今もずっとそこに明確にあつて、心のどこかが気おくれをしている。

十
十

「うー、もつとわかりやすく人間嫌いっぽい夕陽さんには、がんがん行けるんですけどねえ

ええ」と、ある日、楓さんにぐちることでもないのだけれど、ぼろりと口に出したら、にやにやと嫌な笑顔が返ってきた、

「あれ、ほんとにそれ、理由わからないの？」

「え？」

「嫌われるのが、怖いか怖くないかの差でしょ」

あつさりとこの数か月の悩みを一刀両断されて、私は何かしら、否定的な相槌を打とうとした。でも、それは恐ろしいくらいしつくりきて、口がなかなか言うべき台詞を見つけれない。営業先だから、身内だから、という差ではないのは、わかっていた。

夕陽さんには、最悪、最初は嫌われたって、ぜんぜんかまわないと思ってる。めんどくさいお喋りだな、と思われても、それがいつのまにかなんとなくいなくなるときみしくなつて、大切でも大好きでもないけれど、なんとなくそこにいるのが自然な相手だと思つてもらえれば、それでいい、と。

それに、夕陽さんには私を鬱陶しがりこそすれ、抱きすくめてほつぺたにキスをする義理はないのだし。

でも、遊佐さんの場合は、ちよつと違つた。

配属が決まり、すぐく緊張をして挨拶に来たときに、自分よりずっと年上で、たしかに若作りはいつさいしていないのだけれど、でも、どう見ても「若い」と言いたくなる、きれいな女

の人が、パソコンに向けていた難しい顔から、ばあああっとはどけるような笑顔になり、「まさか下に女の子が来てくれると思わなかったわ、すごくうれしい」と手を差し出してくれたときの、たしかに「望まれている」と思えたあのときのうれしさが、今でも大事に引っ張り出しては胸を温めるくらい、鮮烈な印象として残っている。

べつに、手を引いて連れまわしてほしいとか、やさしく頭をなでてなぐさめてほしいとか、そういうことではなくて、ただ、わからないのだ。

あのときの遊佐さんは、お愛想を使っている感じがしなかった。向けられた笑顔が、すごくすぐく、きれいだと思った。私がいるだけで、こんなに喜んでくれる人がいるなんて、まるで初恋みたいに浮かれてしまった。

ミスはしているけれど、正直に仕事をしてはいると思う。報告だって、相談だって、それこそうつつとうつと思われてもおかしくないくらい、しつかりしているつもりだ。話せば、あ、やつぱり話しやすいな、と思う。尊敬できるな、と思うし、うぬべれかもしれないけれど、遊佐さんも今の仕事ぶりはどうであれ、私のことを買ってくれているのかな、と感じられることも多々ある。

でも、なんだか一枚、L字の位置に座った上司との間にはベールがある。

あのとき感じた確かな親密さが、しゅるりと損なわれてしまった理由が、いまひとつ、私にはよくわからないのだった。

「あーあ、図星だ」

ときどき遊佐さんよりも同じ会社の先輩っぽく思える雑さで、私に絡んでくる楓さんは、業しげに人のほつぺたを引つ張った。ひどい。お昼にチークを塗り直したばかりなのに、と思う。

「ほつぺた返してください！」

「おーこわい。怒るとね、ふくれたまま戻らなくなるわよ？」

「まだ若いんで新陳代謝いいから大丈夫です」

それさ、私はともかく、葉子の前で言える？ 言えるなら言ってごらん、お嬢ちゃん、と目が笑っていない笑顔で脅され、また反対側のほつぺたをつままれる。

かと思うと、一転してふわりと聞き分けの悪い妹に論す姉のような口調で、「まあ、あの人はねー、たいした人だからね。千海くらいじゃ太刀打ちできないんじゃない。うん、無理無理！ 悩んでもしょうがないからやめなさい」とぺちぺちとほおをはたきながら、微笑んだりするのであった。明らかに親身になっている口調で。

その瞳に見つめられていたら、なんだか甘えた気持ちりが沸き起こり、するりと怖くて訊けなかつた質問が口から出た。

「……遊佐さん、私みたいなタイプってきらいだったりします？」

返事は即答だった。

「ないわよ。なんか千海は気にしてるみたいだけど、あの人ね、適当に見せかけて腹に一物

あるタイプじゃなくて、ほんと適当なだけだから。苦手なタイプだったらだつたで、へらっへらしながら、やだー、来てもらつても困るけど、お互い楽しくやりましょーとか平気で言うから」

私の前に、長くこの病院を担当していたのが遊佐さんで、八年近くキャリアがかぶっている楓さんの言葉には、説得力があつた。

「……………なるほど」

それより、と今度はせっかきさつきブラシを入れた髪を、ぐしゃぐしゃにかき回される。

「そもそも同業他社のライバル営業に、ぺらぺら喋る内容じゃないでしょ。減点！」

「すみません」

「まあ、私は千海がこうしてずうっと、ぼけーつと隙だらけな方が得するから、別にいいんだけどねー」

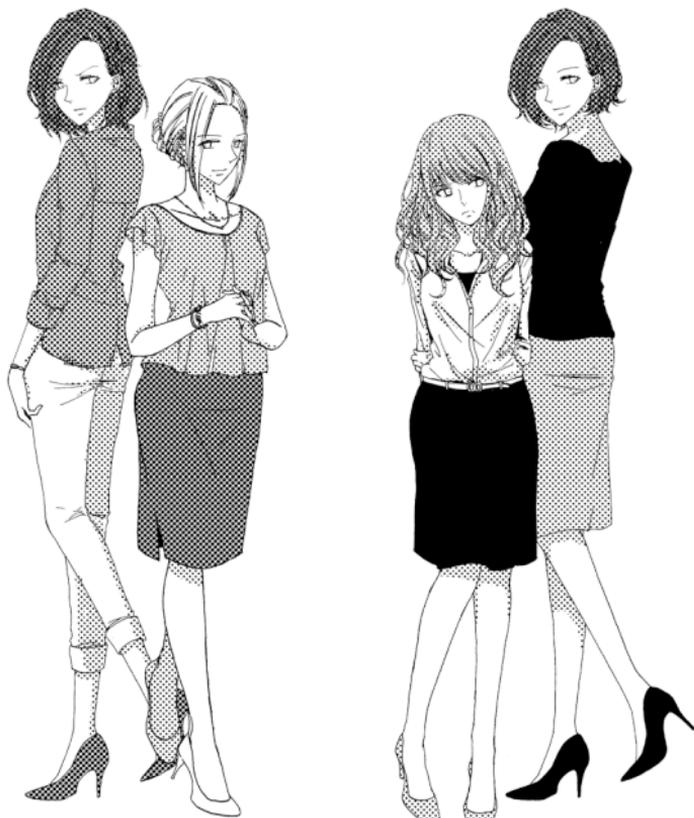
私、あなたの上司じゃないし、とおどける女の人は、でも今の会話に限定しなくとも、会社は違えど明らかに、頼りになる先輩であることに間違いはなかった。

Main Dish

Something tasty to make you full.

5. Vacance

- おしつけバカンス -



Kaede
(Age.26)

Yoko
(Age.29)

Runa

Kaede

いつかのわたしと、今日のあなた。

Pov. Kaede

「せわしないわねえ」

ばたばたと歩き回るピンク色の人影に、いい加減見かねて声をかけたのは、手の中のカフェオレがだいぶ汗をかいた後だった。テーブルに置くと、からんとテイクアウトのプラスチックカップの中で溶けた氷同士がぶつかり、少し液体の色が薄くなる。

「でも」

ほとんど癖になつて逆説の接続詞を口にした相手に、片眉を上げて先を促してやると、「だって」と、今度は少しニュアンスの違う接続詞が返ってくる。だいたい、接続詞を喋っているとき、人はまともな言葉など持ち合わせていないものだ。それは、自分の身に照らし合わせてみても火を見るよりも明らかで、案の定、しばらく待つてあげても、口火を切ったはずの接続詞の後に続く文章は、いつまで経っても聞こえてこなかった。

「しょうがないじゃないの」

仕方ないので、いたつて年長者らしく窘めてみる。私ののんびりとした口調にも、かすかに彼女が苛立っているのが分かった。人は、自分より寛いでいる人がいると、気に障るものだ。本人がまったく気づいていないので、それに付き合ひ、こちらも気づいていないふりをし、更に適当に言い放つ。

「出られないんだから、待つしかないじゃない。いつか出られるわよ」

でも、とふてくされた声が、再び最初の逆説に戻る。まだため息を吐くわけにはいかない、とばかりに結ばれた唇ごと、ぷいっと音を当ててくなるような調子で、千海瑠菜は、大きく右を向き、一メートルほど先の壁を睨んだ。

「いつかって、いつですか」

見つめる先には、子どもが画用紙に描いたような立体感のないドアがある。こちら側には、取っ手すらない、開かずのドアが。

十十

もつとも、はじめりは、「自業自得」という言葉がよく似合う。

いつも通り、朝の御目通しだけ済ませて、さあ眠気覚ましにカフェラテでも飲むか、と中庭に出たところだった。「ずいぶんゆつくりしてお出ましですね」私よりもさらに早く来ていたらしいライバル会社の新人営業が、鼻歌でも歌いだしそうな顔で、熱いカフェオレをすすつていた。

「あらあ、これでも気を利かせたのよ？」

満足げな千海瑠菜の横、いつもの、と言うまでもなく出て来たアイスのカフェラテを手に、

どしんと腰かける。

「だって、私の方が先に来てたりしたら、新人ちゃんの面目、丸つぶれだもんね？ やだ、明日からいつたい何時に起きればいいのよ、優秀すぎるわ、楓さん！ って、今日の夜はお目目を真っ赤にして泣かなくちゃいけないくなるでしょ」

たつぷりと注ぎ込まれたミルクとコーヒーが、まだ二層になったままのカフェラテを、そのまま一口飲む。吉野桔梗によく、変な飲み方、と言われるけれど、こうして飲む一口目が、やつぱりいちばんおいしい。うーん、カフェイン！ と満足し、それにしても言い返してこないなあ、とぼぎつとしたグリーンのストローで全体をゆっくりかき混ぜようとしたら、「やつぱり」と不満そうには聞こえない、そして新人ちゃんの声にしてはしつとりとした知性的な声がかけられた。「ここに揃ってると思った」

「畑中先生」

ついさつき、「後ほど」と言っただけの相手の出現に思わず立ち上がると、白衣をきちんと着こなした女医さんは、「今日はこの後、一雨降るらしいですから、中で待っていたらどうですか？」と珍しいことを言う。返事を留意しようとしている間に、「もしよろしければ、ですが」という注釈が付けられる。私の方が年上だというだけで、発注先の営業相手にも、しっかり敬語を使うところがこのお医者様の珍しいところだ、と嬉しくなる。

一方で、ありがたい申し出のはずなのにすぐに返事をしない自分が、この会話に何かしらの

違和感を感じていることにも気付いていた。なんだっけ、この感じ……前にどこかで……と記憶を探っていたら、急に左腕を引かれて思考が途切れた。

「わ」

「ありがとうございます！ ね、行きましょうよ、楓さん」

返事は周りの人の分もまとめてあなたが返しなさいね、と新人教育でも受けたのだろうか、という熱心さで、他社の新人ちゃんが、勝手に私の返事もしていた。

そうしてあれよあれよと通されたのが、この部屋だったわけである。

たしかに、ここなら雨が降っても気付かまい。

濡れない、とはまた違う。二十畳はあろうかというだだっぴろい空間なのに、どの壁にも、いつさい窓がないのだ。壁に耳を付けてみても何の音もしない。おそらくこの中にいれば、外で台風が起きていても気付かずに眠っていられるだろう。

それにしても目が痛くなるような白だ、と思う。そのせいでよく目を凝らさないと、正確には四隅がない部屋の隅が、俯瞰して見たときに楕円形を作るべく反っているのに気付かない。

なるほど、と手に持ったままだったプラスチックのカップをこれまた真っ白なテーブルに置き、私は早々と諦めることにした。

松永楓が思い切りの良さを売りにしていることくらい、もともと先輩に聞いて知っていただ

ろうに、いつしよに閉じ込められたお姫様は、どうやら私が寛いでいるのがご不満らしい。

それで、さつきからずつと、かつかつとヒールを響かせて部屋のあちからこつちへと歩き回りながら、「でも」だの「だって」だのを、静かな空間を当座の装飾物で埋めるみたいに、ぼんぼんと投げ続けているわけなのだった。

これが吉野桔梗なら、こつこつとボールペンでバインダーをたたき、「Cマイナス」なんてメモをつけるふりをするんだろうな、と思う。目の前で、未だうろろと所在なさに歩き回る千海瑠菜と私の最近やたらと増えつつある「共通の知人」の中でも最初の一人である、ちつとも大学の講師に見えない、やたら顔の綺麗なあんな女なら。

一方、人を評価する立場になることを巧妙に避け続けてこの歳までやってきた私は、同業他社のライバル営業と呼ぶには、まだまだ少女めいた挙動の多い新卒ちゃんに、「座つたら」と優しく促した。もう何度も嘔みしめているはずなのに、まったくツヤを失わない唇が、何か言いたげに少し尖る。

ジルスチュアートの新作ルージュ、たぶん六番？ と見当をつけてみる。まるで、子どものころに夢中になった美少女アニメの変身タクトのような形状をしたオイルルージュは、きつと、この子のメイクポーチによく似合うだろう。私はと言えば、あれが家のドレッサーに置いてあるのを想像しただけで、気恥ずかしさで赤面してしまっただけだ。

後十若いときにもつと素直であれば、と思う。かわいらしいものを、素直に「かわいい！」

といちいち声に出して、周りに知らせずにはいられない、あの、女子らしい性質をその当時に持ち合わせていれば。今頃、私のドレッサーにも、もう処分した方がいゝ何シーズンも前のジルスチュアートのリップグロスが、ころんと転がっていたりしたのだろうか。

女であることは、十分に楽しんでるつもりだけれど、年齢差以上にだいたいぶ年下に思える新卒ちゃんを見てみると、わたしは「女の子」であることは楽しみ切つていなかっただんじやないか、という気がしてくる。

だから、夕陽がこの子に厳しくなりきれないのは、ちよつとわかる。

千海瑠菜は、間違いなく優秀で、自立していて、おそらく一種意図的な図々しさと世間知らずさを持ち合わせて、そして明らかに聡明だ。それでいて、私たちがクラスの向こう側に見ていた「あのグループの子」という立場も満喫している。それが、とても強くて美しく見えるのだ。今の子、なんて言い方をしたくはないけれど、この子を見ると、今の子は健やかでいいな、と素直に思う。

いつも私は、離れた場所でこの新人ちゃんのことを思い浮かべるとき、隣に、十年ほど前、ある種の女の子はみんな知っていた映画の主人公の姿を並べてしまう。きらきらしたソリテイからロースクールに輝くべき舞台をあつさりと変えてしまった、聡明なブロードのことを。あの当時、たくさんのキラキラした女の子たちが彼女に憧れていたけれど、たぶんそれよりもずっと熱を持って盗み見ていたのは、きつと、私みたいな「強くて賢い女の子」として、あ

のときまで生きてきてしまった人間だったと思う。もともと、目の前で映画のヒロインよろしくピンクの空気を振りまいているこの子自体は、ぜんぜんあの映画のリアル世代じゃないんだらうけど。

私はときどき、自分にはなし得なかったトリックを簡単に成功させた共犯者を見るような気持ちで彼女のことを見つめてしまう。どこか羨望のにじむ悔しさでもって。無防備に賢く、少女のまま強い。この気持は日に透かして見ると、限りなく憧れに似ている。

とはいえ、社会人になって早半年。にもかかわらず、こんなに無防備なキラキラ感を仕舞わないのは、たぶん、彼女なりの作戦なのだろう。我々の営業先である畑中先生のキャラクターを把握した上での。実際、それは一定の効果を見せ始めているし。

そんなこちらの分析など知る由もなく、ようやく足を止めた茶髪のロングヘアは、決してまだ歩き回るのを諦めているわけではないという目つきでドアをにらみながら文字通り唸った。

「ううううううう。これ、つまんないですね」

こうしてると、その子どもじみた反応は、とても演技には見えない。たぶん、本当にしあわせに生きて来たつても大きいのね、と考え、自分の分析したがりの癖を頭の中で笑いながら、私はどんつとソファアーに腰を降ろした。

当たり前のように、こちらにも真つ白なソファアーだ。まったく、コーヒーを飲むのに緊張して

器しこんであるみたいだし、ここ。

たしかにちよつと白くて眩しいけど、日焼けをする心配もないし、二人が座れるどころか横になれるサイズのソファもある。ここからコンタクトいらすの視力で見たところによると、壁際のあのスペースにお菓子と飲み物もあるみたいだし」

あとはまあ、と出来るだけ気軽に付け加える。

「トイレはちよつとわかんないけど、飲み物控えてりゃ、畑中先生が迎えに来るまでくらは、大丈夫でしょ」

人の世話焼いてる場合じゃないわ、と自分の言葉に冷静になり、手元のアイスカフェラテを向こうへ押しやりながらにつこりしてみせる。

「……お手洗い、さつき行つといてほんとよかつた」

ほとんど悲鳴のような口調で、花も恥じらう年頃のお嬢さんが呟いたのを、私は諦めた証拠と捉えた。ぐつと身を乗り出し、たたみかける。

「ふうん、ラッキーじゃない。大丈夫大丈夫、そんなツイてるなら心配しなくても、直に出られるわよ」

いやー、千海ちゃんきつと今日の星座占い一位ね、と適当な軽口をたたきながら、「じゃ、まあ、食べますか、お菓子でも」とダメ押しのようににつこりしてやると、会社は違つても、年上の人間がいる限りあふれ出す新人らしさをいかななく発揮せずにはいられないタイプらし

いお嬢さんは、ようやくこちらの提案に乗ってきた。

「……取ってきます」

楓さんは座っててください、と。

Main Dish

Something tasty to make you full.

6. Omelette

- AM2:00 のオムレツ -



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

たまごの割れない人生が良い。

Pov. Kikyo

「遅いんじゃないの、お姉さん」

目が合うなり、既に何杯呑んだのだろう、という柄の悪さで絡んできた背の高い友人の横に腰を降ろしながら、私はいつ来ても一新されてしまっているメニューをざっと眺め、フローズンダイキリを注文した。前回呑んだ桜のカクテルは、もうメニューにない。もつとも、あれは季節感のあるものなので、仕方ないといえば仕方ないのだけれど。マスターが至って研究熱心な性格らしく、気に入ったメニューに二回以上出会うのが、このお店ではとても難しい。

「とりあえず、それで」と注文を終え、「あなたより年上になつた覚えはないんですけど」とにっこりしようとしたら、「あ、待つて。私にも、フローズンマルガリータをください」人が閉じようとしたメニューを横から覗きこんだ松永楓が、私の返答を無視し、カウンターの中心に向かってよく通る声で追加注文をした。

元氣よく始まり、最後は丁寧に終わるオーダーの仕方が、彼女の人の対するスタンスそのもので、ああ、松永楓に会っているのだ、とほぼ会話を交わさない内にしみじみ実感し、横に座る女性を眺める。以前は、ほぼ毎日のように飲み歩いていただけけれど、最近、新しいオモチャができたせいか、どうも気が散っているように見える、旧知のショートカットを。

「いい服ね、それ」

目についたことをそのまま口にしながら、熱いおしぼりを使う。このお店のいいところは、夏でも熱々のおしぼりを出してくれるところだ。いつも、このまま「おやすみ」と呟いて机につつぶして眠ってしまいたい衝動に駆られる。

「私もね、あんたが年下だと思った記憶がないんだけど、それはさ、終始タメ口だからだって、今気づいたわ」

ちよつと前の発言に、今更リターンエースが返ってきたけれど、私も隣の賢いお姉さんを習って、その剛速球を軽く無視することにした。

今よく集まっているメンバーの中では珍しく、私と彼女が知り合いなのは、まったくの偶然によるところが大きい。こんな年齢差で同じ学校に通っていたのに、学生時代にはほぼ関わりがなく、仕事を始めてから、それも仕事でもなんでもないお酒の場でうっかり出会った。互いの年を訊く前に、だからだと喋り、ワインの瓶を二人で三本開けたので、最後のコーヒーを飲みながらようやく年齢を確認し合ったところで、そこから改めて喋り方を修正することはできなかつた。

そんな成行きに任せて、三歳年上の上下関係にうるさそうな相手に出会ってからこちら、私はタメ口もタメ口で通している。

「DRAWERのスカート？」とこちらも強引に会話を前に戻して尋ねてみると、不満そうな気配を続けるか、あるいは消すかという逡巡が感じられ、その間に、お酒が届いたのが功を奏し

たらしい。

絡むのを諦めたあつきりした声音で、「TOMMROWLANDよ」という返事が返ってきた。そのまま、するりと先手を取られる。「乾杯」

そっけなくグラスを当てる乾杯の仕方は、我々のお約束で、その発声を取られた方はグラスを上げもしないことになっている。お互い、仕事で散々芸のない「お疲れ様ー」はやつてきた人生なので。私たちの乾杯は、ときどきカウンターのなかから不仲に見られるくらいそっけない。「いただきます」乾杯の代わりに子どものように手を合わせ、私は至福の一口目をすすす。子どもの頃には、大人はなんでアイスを食べないんだろう、と思つていたけれど、こんなにも幸福な冷たさを知っていたら、たしかにシャーベットなんて食べどころだろう。

「美味しい」

ほんと、と隣で似たようなグラスと向き合つていた年上の女が、相好を崩す。

「どうせお店の中はしっかり暖房が効いてるんだから、別に冬に飲んでも春に飲んでもいいんだけどさ、こればかりは、夏の匂いを嗅いでから飲みたいのよね」そう言つて、シャツの袖をまくる。

おそらく仕事中はしつかりタックインされていたのであろう深いネイビーのシャツは、今はゆつたりと襟を抜いて後ろをスカートの上にたるませている。つるんとした素材のこういうシャツを、松永楓は数十枚、クローゼットに持っているに違いない。スカートはすんとした

形で、ぎりぎり膝を隠す丈のタイト。一切スリットが入っておらず、素材のストレッチ感のみで歩きやすさを追求しているデザインが、とても松永楓っぽい。

この人の格好が好きだな、とその残像をまぶたの中で確認しながら、しみじみ思った。

きちんとしているのに風通しがよく、ひとつひとつのアイテムに、日々働いていることをたぶん楽しんでいるのだな、と感じられる手入れの良さがある。だから、だいたいちよつと仕事にやる気なくなると、私はこの少しだけ年上の友人と飲むことにしている。松永楓と会って、仕立ての良いシャツの一枚でも買えば、私の労働意欲はあっさりと回復する。もつとも、彼女よりずっとドレスコードの緩い職種なので、実際に、そのいつもより対価として飛んで行く福沢論吉が多いそのシャツは、なかなかその後出番がないのだけれど。

「ああ美味しい」でもアルコールが足りない気がするからやつぱり、ウイスキーのロックももらおう、と自由な注文を繰り広げている松永楓に、それで言うのと、私はつぶやいた。

「キュウリのサンドイッチ」

「え、なに、キュウリ？」

食べたいの？　ここ居酒屋じゃないから、待っててもお通しでは出てこないと思うけど、と言うリアクションに苦笑して頭を振る。

「そうじゃなくて、ある季節以外なんとなく摂取しないものって、私の場合、キュウリのサ

ンドイツチかもって話」

ああ、とカウンターの奥のウイスキーリストを眺めながら、年上の女が言葉だけこちらに放ってきた。

「好きなの？ 結構ピンポイントな好物よね、それ」

「うーん、特に好きってわけでもないわ。好物ってわけじゃないんだけど、春になると無性に食べたくなるっていうか。夏も、最初の方はいいんだけど、うだるような暑さの八月には、既に選ばなくなってる。なんていうか、春から初夏以外は存在も忘れてるかもしれない」

食べると美味しいなって思うんだけど……と首を捻っていると、「そうね、キュウリのサンドイツチねー」あれ、単独で頼むこととてまズないんだけど、盛り合わせの中にあるとうれしいのよね、と大きく賛同の頷きが返ってきた。

「パンは薄ければなんでもよくてさ。いつそ別に食パンやサンドイツチ用のパンでなくもいいし。ともかくしつかりバターが塗られていて、キュウリの水気が切ってあって、新鮮なマヨネーズが使ってあれば、それだけでもう美味しいじゃない。あとはちよつとデイルを散らしてあげれば完璧！」

つて、なんか俄然食べたくなつちやつたじゃない、とひとりでテンションをあげた松永楓が、ばらばらとメニューをめくりだす。「ウイスキー頼むし、ついでに食べ物も頼んじゃおう」

そうね、と返しながらかストローをくわえる。私もそのタイミングでおかわりを頼みたい。次

は何にしようかと思いを巡らせていたら、「でも、ま、たしかになんとなくわかるわね」と言われ、最初、なんの話かわからず隣を振り向いた。

「え？ ああ、サンドイッチの話」

ハムやたまごといっしょに挟んだものなら年中食べていいんだけど、キュウリ単体だとなぜかね、と注釈を付けながら、肩をすくめて見せる。「なんでだかね」と意味のない言葉を重ね、私もぼんやりとメニューを眺める。特に掘り下げる話題でもない。

メニューは新鮮で面白かった。

ということとはつまり、案の定、先々週末たときは、めくるページめくるページほぼラインナップが違うということで、まったくこのマスターの研究熱心さには恐れ入る。あのとき食べたアボカドとお豆腐のタルタル美味しかったんだけど、と恨めしい気持ちで一新されたタバスのコーナーをざっと目でスキャンした。

オリーブオイルに岩塩とピンクペッパーというシンプルな味付けながら、アボカドにはほんのりスモークしたペーコンの香りがうつつていて、めちやくちやなお酒の飲み方をする松永楓でも、お店のオススメ通り、よく冷えた白を頼んでいた。

「うわあ、このフライドポテト、今食べたら罪よね。罪だろうなあ」

ラザニアをかけたフライドポテトという、なんだかよくわからないメニューに興奮した声を

あげているショートカットの女に、いいんじゃない、と適当な相槌を打つ。

「じゃあ頼も。頼んでやりましょうよ。うー、なんでだろ、ファストフード以外のお店でジャンクなものを頼むときつて、なんかテンションが上がるのよね。あれ、なんでなの？」

うれしそうにページをめくり続ける松永楓に、私は、口から先だけで考えたようなことをつらつらと返す。「さあ。明らかに悪いことをしてるけど、絶対に誰にも怒られないってわかつてるときつて、何かしらのホルモンが出るんじゃない。安全な場所で悪いことをするのつて、人間の根源的な快楽だから」

この組み合わせで飲むと、なんだか脈絡もなく結論が出ない話をしてしまうな、と思う。

たぶんそれは、別に共感し合えなくてもいいし、相手を説得しなくてもいい、とお互い思っているからだろう。現に、最初に疑問符を持ち出した相手の方は、既にジャンクなフライドポテトのことなど忘れたかのように、存外な熱心さでメインのページを熟読している。かと思うと、大げさなため息と共に、また話題が前に戻った。

「ないわね、キュウリのサンドイッチは」

まあ、そんなに我々に都合よく世界は回ってないか、と楽しげにがっかりする女に、そりゃそうでしょうよ、と私も苦笑する。

もちろん、我々が座っているのはカウンター席だし、バーのマスターと言うのは、聞いていないようでお店中のお喋りをすべからく聞いている生き物だ。このタイミングでさつきまで黒

子のようだったマスターがやってきて、「できますよ、それ」という展開も他のお店ならば大いに考えられる（もつと広い融通の利かなさそうなお店でも、私の個人的体験に限って言えば、しばしばそういう甘やかされ方はされる）のだけれど、この店に限ってそれはなかった。

軽くウエーブがかかった長い髪をいつも片側に寄せていて、いつも黒い服を着ているこのマスターは、誰でも等しく平等に放っておく。かゆいところに手が届くような細やかな接客はなく、常連や饒舌な一見さんと、にこやかに談笑したりしない。ただ、頼んだことへの対応は、とても速やかだ。ちなみに言うと、ここであれば、他のお店みたいに、呑みきれない量のお酒が「あちらのお客様から」届いたりもせず、この「それぞれ勝手にどうぞ」という感じが心地いい。私がひとりでお酒を飲みに来るのは、そういうわけでこの店だけだ。

予想通り、マスターはしゃしゃり出てくることもなく、私達の会話は中絶されなかった。真剣にメニューを睨んでいた松永楓が、これとこれとこれが食べたい、と音読したところでようやく影が近づいてくる。

やたら記憶力のいい女は、端折ることなく、先ほど読み上げた料理名をすらすらと諳んじ、思い出したように、メニューをこちらへ寄越す。「あなたは？」もちろん、キュウリのサンドイッチはないメニューを。ほんの少し考えて、「アマレットジンジャーとプレーンオムレット」と二品注文を増やした。

「さあて」

頼んだ頼んだ！ と満足そうに氷を揺らし、端正なシャツを着崩した女は幸福そうに脚を組んだ。その手の中には、既に先ほど頼んだマツカランのオン・ザ・ロックがある。作り物めいた氷を撫でる白い指の先できれいに整えられた爪には、何の色も塗られていない。MRはネイル禁止ではないので、これは本人のポリシーなのだろう。そういうところが松永楓らしいなと思っていたら、するりと手がグラスを離れ、気づけば整った顔が目の前で頬杖をついていた。

「たぶんさ、吉野桔梗は、季節で食べるタイプなのね」

一瞬、なんのことかわからなかった。よほどぼかんとした顔をしていたのだろう。キュウリのサンドイッチ、と何度目か戻ってきた話題に対するコメントだと示唆される。どういう意味だろう、と考えている間に飛んできた次の言葉に、私は今度こそ、ぼかんとした顔になってしまった。

「あなたさ、かなり小さい頃から、自分で料理してるでしょ？」

射すくめるような瞳に、言われたくない真実をいつも勝手に告げていく名探偵のような、有無を言わさない口調だった。

+ Adult but Platonic. +

Saturday

Lunch Menu

無責任会社サタデー
saturday.m.company@gmail.com

文・星羅にな
絵・綺月るり

発行 2016年6月5日 初版発行

印刷・製本 サンライズパブリケーション株式会社様